

「ほほえみ派遣団の肌で感じた国際協力」

団総務 大橋 俊彦

今回の派遣事業は、国際協力をテーマとして実施する初めての事業であること、また、国際協力そのものが、まだごく限られた人やNGO団体などの活動に負うところが多く、地域の中で国際協力の主旨や内容が十分に浸透していない状況の下での実施に多少の不安を抱えながらも、その幕は切って落とされた。

10月26日早朝、比較的暖かな気温の中、団長をはじめとする一行12人は、まだ完全に眠りから覚めていない中、お互いの冗談にほほえみを浮かべながら、新千歳空港を出発し、最初の訪問先であるタイへと旅立った。

秋の北海道から気温30度を超す猛暑の中での10日間に及ぶ研修で、体調を崩さないだろうかと出発前に心配していたが、バンコク空港に到着したとたんその心配は吹き飛んだ。団員各人の異国の地に対する好奇心や研修が始まるという緊張感、また、若さにあふれるパワーが旅の疲れさえ吹き飛ばし、更に現地ガイドの優しさあふれるほほえみに迎えられ、この派遣事業の成功さえ予感させてくれた。

タイ、マレーシアとも首都(バンコク、クアラルンプール)は、東京と見間違うばかりに高層ビルが建ち並び、工業化が進むなど都市機能は充実していたが、一歩郊外に足を踏み出すとそこにはスラムが存在するなど実際に訪れてわかる部分が多かった。特に、バンコク郊外のスラム街でそこに住む子供達の教育援助、生活改善等に取り組んでいるNGOプラティープ財団の視察では、急激な都市化により生じる貧富の差やその格差が生活に及ぼす様々な問題等を自分の目で見るとともに、そこで私財をなげうって子供達の教育援助や生活改善等に取り組んでいる地元のボランティア及び日本人ボランティアの姿(=己の利益のためではなく、人の役に立つため、また、自己の社会貢献意識の高揚、知識の向上のため活動

する姿)を目の当たりにし、また、ボランティアの方々個々と話ができることは、団員各人が今後自分ができる国際協力とは何かを考えていく上での大きな道標になったとともに、自分の生活を見つめ直すきっかけになったものと思われる。

また、クアラルンプールでは、多民族国家(マレー系61%、中国系30%、インド系・その他9%)の難しさを知ることができた。最多民族であるマレー系民族に対する優遇政策の結果、社会的弱者として十分な教育も受けられず落ちこぼれとなつた中国系、インド系等の青少年を対象に職業訓練援助を行っているモンフォートボーアイズタウンは、日本(JICA)からの資金援助や青年海外協力隊員の派遣を受けながら運営されている民間の施設であり、団員たちはここでも国という枠を超えた支援・協力の重要性を肌で感じたものと思われる。

このほか、タイのペチャブン苗畑センターやピサヌローク産業育成センターで活躍している青年海外協力隊員や海外シニアボランティアの方々の活動状況の視察を通じ、日本の国際協力や技術支援の現状を知ることができ

た。

また、各視察先では、現地の職員のほほえみを絶やさない熱烈な歓迎を受け、友好を深めることができ、研修の合間の観光では、水上生活者の様子やアユタヤ、スコタイ遺跡、寺院、王宮等タイ、マレーシアの歴史文化を十分に感じることができた。

研修期間中、連日の30度を超える暑さの中で、冷房の効きすぎるバスでの移動、交通渋滞と充満する排気ガス、香辛料のよく効いた食事等慣れない環境のため、疲れやストレスがたまつた時期もあったが、団員の方々の統一ある行動と意欲、そして団長はじめ団員全員の明るさとほほえみと協力により、スケジュールに沿つて効率的に事業を実施できたものと感謝している。今後は、この研修で得た貴重な体験を生かし地域の国際協力活動のリーダーとして活躍されることを期待している。

最後に、この派遣事業に多大のご協力をいただいたJICAの職員の方々をはじめ、事業に携わった多くの関係者の方々に心から感謝いたします。

(北方圏センター国際協力部部長代理)



植林活動を行う青年海外協力隊員の活動現場を訪問（タイ・ペチャブンの苗畑センター）